

委15-1

第14回 宇宙開発委員会（定例会議）

議 事 要 旨（案）

1. 日 時 昭和56年8月5日（水）

午後2時～3時

2. 場 所 宇宙開発委員会会議室

3. 議 題 第一部会の審議結果について

4. 資 料

委-14-1 第13回宇宙開発委員会（定例会議）

議事要旨（案）

委-14-2 宇宙開発委員会第一部会報告書

5. 出席者

宇宙開発委員会委員長代理

吉 誠 雅 夫

“ 委員

斎 藤 成 文

“ “

井 上 啓次郎

“ “

大 塚 茂

説明者

宇宙開発委員会第一部会長

中 口 博

“ 第一部会衛星系分科会長

野 村 民 也

関係省庁職員等

科学技術庁研究調整局長

加 藤 泰 丸

文部省学術国際局審議官

大 崎 仁

（代理：横山）

通商産業省機械情報産業局次長

宮 本 治 男

（代理：吉田）

“ 工業技術院総務部長

村 野 啓一郎

（代理：久佐）

運輸省大臣官房審議官

小 林 哲 一

（代理：島田）

“ 気象庁総務部長

栗 山 昌 久

“ “ 総務部企画課長

駒 林 誠

郵政省電波監理局審議官

高 橋 幸 男

（代理：磯野）

“ “ 宇宙通信開発課

安 成 知 文

建設省大臣官房技術参事官

田 中 淳七郎

（代理：石原）

宇宙開発事業団システム計画部長

山 口 弘 一

事務局

科学技術庁研究調整局宇宙企画課長

吉 村 晴 光

“ “ 宇宙国際課長

中 津 川 英 雄

“ “ 宇宙開発課長

吉 野 隆 治

他

6. 議 事

(1) 前回議事要旨の確認

第13回宇宙開発委員会（定例会議）議事要旨案（資料委-14-1）が確認された。

(2) 第一部会の審議結果について

中口 博 第一部会長より、資料委-14-2に基づいて説明が行われたのち、野村民也衛星系分科会長及び中口 博第一部会長より以下の補足説明が行われた。

中口：部会報告書のとりまとめの際に、関係省庁に対して、計画遂行のための予算の獲得に努力するよう要望する旨の発言があつた。また、東京大学宇宙航空研究所におけるMロケットの開発は、同ロケットの信頼性が得られる段階まで行うという従来の考え方は、同研究所が文部省宇宙科学研究所に改組されたことに伴つて変更を生ずるか否かの質問が出され、吉識委員長代理より、変更はない旨の回答がなされた。

また、第一部会及び分科会で、それぞれの報告書に示したような基本問題が提起されたが、短い間に答を見出すことはできなかつた。来年の第一部会及び分科会の審議に間に合うように基本問題について、委員会が大綱を補完するような指針を検討することが望ましいと考える。

野村：測地衛星1号(GS-1)については、測地学審議会等から強い要望が出されているが、予算の制約のもとで、衛星として開発するのは困難であるので、H-Iロケット(2段式)試験機のペイロードとして実現することとした。

通信衛星3号(CS-3)については、通信衛星2号によるサービスの中断を防ぐため、62年度頃に打ち上げることで分科会として意見の一致をみたが、衛星の諸元については

引き続き利用者機関で検討を行うこととなつた。なお、利用者機関より、通信衛星3号の検討の際には、経済性を重視したい旨の発言があつた。

航空・海上技術衛星(AMES)については、独立したミッションとして衛星を開発することは難しいので所要の研究を行うこととした。なお、航空・海上技術衛星に関する研究成果がH-Iロケット(3段式)試験機のペイロードに反映されることを要望する旨の発言があつた。

技術試験衛星V型(ETS-V)については、衛星バスの開発方針が明らかになつていない現状を考慮し、所要の研究を進めることとした。

中口：輸送系分科会の審議においては、H-Iロケット試験機を2段式と3段式の2種類打ち上げる必要性について、経費節減の面からも検討を行つたが、2段式と3段式の両方が実用衛星打ち上げに用いられること、2段式では第2段の再着火を行うが、3段式では行わないこと等のため、要望は妥当であると判断された。

また、R-J-1の国産化のめどがたつたことは、明るい材料である。

こののち、以下の発言があつた。

吉識：文部省宇宙科学研究所の発足に伴い、Mロケットの開発に関する了解事項が引継がれるのみならず、同研究所は研究の

分担を含め、我が国の宇宙開発のため一層協力していくことが了解されている。

中高度衛星を打ち上げる場合、2段式で再着火する方法が良いのか。

中口：一般論としてミッションが決まれば各段の諸元は決まる。

H-I ロケット 2段式で中高度衛星を打ち上げるには、再着火が必要となる。

野村：3段に固体モータを使つて中高度衛星を打ち上げられないことはないが、3段固体モータ燃焼の際には、スピンをかけて安定させる必要がある。

ERS-1のような中高度三軸衛星の打上げには、スピンをかけない方がやりやすいので、2段式の方がメリットがある。

斎藤：分科会審議を聞いていて、委員長代理と同様な疑問を持ったが、宇宙開発事業団ではいくつかの代替案を検討して、第2段の再着火が最適との結論を得たと聞いている。

第一部会報告書のIX留意事項については、委員会としても十分に検討したい。